

第3学年 社会科の実践

1 単元名 もっと知りたい わたしたちのまち

2 単元目標 町たんけんをして絵地図にまとめることを通して、身近な地域の特色や様子は地形条件や社会条件の影響を受け、場所によって違いがあることに気づく。

3 ひびき合う児童をめざすための指導の工夫

児童がそれぞれの考え方や思いを交流させ、物事の見方や考え方を変容させていく「ひびき合い」をめざし、すべての教科、その他の生活の中で次のような点を意識して指導した。

第一に、些細なことを気軽に話すことのできる安心感のある学級作りである。そのために、相手の言いたいことを理解しようと努めながら聴く力をつけていくことが重要であると考え、聴き方の指導に力を入れた。まずは、本学級の児童に願う「聴く姿」を、教師自身が実践し、模範を示すことが大切であると考えた。その子なりの言葉を共感的に聞き、必要があれば問い返しをするなどしながら、その子の思いを理解しようと努めた。また、児童と話し合い、よい聴き方を具体的に示し、共有できるようにした。低学年での経験から、「目・耳・心で聴こう」という聴き方の目標をたてた。具体的な姿としては、話している人を見ながら、耳をすませて、頷きながら、最後まで、言いたいことをわかろうという気持ちで聴くということがあげられた。また国語や道徳の学習と関連付け、よい聴き方をすることで、気持ちよく会話ができること、話の中心に応じた質問をすることで話が広がり、深まることなど、よい聴き方をするよさや必要性を感じられるようにした。よい聴き方をしているときにはすぐに認めることを心がけた。その際、「今、みんなの顔を見ながら話せてとても嬉しかった。」「安心して話せたよ。」のように、話し手の思いを考えながら聴けるような言葉にすることや、自分たちが聞いている姿を写真にとって見せるなどの工夫をした。逆に、疎かになっているときには「誰が話すのかな。」「私が〇〇さんだったら、今の聴き方は悲しいな。」というように声をかけた。4～7月は特にひびき合いの素地となる聴き方の指導を重点的に行った。

自分の思いを伝えたい、友達の考えを聞いてみたいという思いがなければ、表面上は「よい聴き方」で聴いていても、物事の見方や考え方を変容させるような「ひびき合い」には至らない。そこで、第二にあげられる工夫は、個の思考・表現を伸ばす支援の手立てである。自分なりの考えや思いをもつためには、教材の吟味が必要である。気になる、考えたい、面白そうと思えるような問題提示を心がけた。また、自分の思いや考え、課題などを明確なものにするために、どの授業においても書く活動を位置づけるようにした。問題に対する考えや学習感想を書くことを重ね、様々な表現方法を身につけることもできると考えた。さらに、学習感想からその子の学びの様子を見取り、朱記や対話によって、一人ひとりの思いを大切に育てていけるように努めた。

第三に、少人数での意見交流の場を多く取り入れることである。そうすることで、どの子にも伝える場を確保できるようにした。話すことで考えに自信がもてたり、見通しをもって全体での話し合いに臨んだりできると考えた。また、ノートや作品などを持って席を立てての意見交流も行い、いろいろな友達と考えを交流できるようにした。その際、ノートや付箋に、その子の考えに対してコメントを書くことも取り入れた。友達に認められたり、曖昧な点を指摘されたりすることで、考えを深められると考えたからである。

さらに、一人ひとりの考えや調べたことを座席表や一覧表にまとめたものを資料として配布することや、板書に誰の考えかを明記することなど、誰がどのように考えているかを明確にしておくことを意識した。ノートや学習感想の紹介などを行うことで、友達のよい学び方を取り入れられるようにした。

4 単元と指導について

①単元について

児童が2年生までに経験している生活科の「まちたんけん」では、それぞれのこだわりを大切に「地域の人・もの・こと」との関わり、愛着を持つことをねらいとしていた。社会科においては、町たんけんに出かけ、発見を交流したり絵地図にまとめたりする活動を通して、身近な町の様子についての理解を深めることをねらいとしている。場所による違い、地形条件や社会条件に気づき、今まで何気なく暮らし、目にしてきた自分たちの町の様子は、様々な条件や歴史の中で築き上げられてきたものだという見方を養うことをねらいとしている。

本単元は、児童にとって、はじめての社会科の学習である。そこで、これまでも経験があり、生活に根ざした「町の様子」について扱っていく。身近な町について、実際に探検で見たこと、つまり「事実」を総合して推測し、確かめていくという問題解決的な学習の仕方を経験させたい。また、児童は、2年生の町たんけんでの経験を生かし、地域の人々に積極的に関わり合う機会をもつことが期待できる。本単元で学習をもとに、1年間を通し、社会科で、様々な立場の人の考え方や生き方に触れることで、多面的に物事を見る力の基礎づくりをしていきたい。

また、本校の学区は、以下のように、各方位の特徴がはっきりとしている。

【南】海、平地、国道1号線、西湘バイパスなどの大きな道、桜並木、一軒家、寺

【東】海、平地、昔ながらの商店街、かまぼこや干物のお店が連なる通り、国道1号線

【北】小田原駅、小田原城など人が集まる場所、商店、高い建物

【西】山、坂道、動植物、学校や陸上競技場などの広い施設

そのため「なぜこのような違いがあるのか」という問題意識が生まれやすいと考えた。また、建物の数や道の様子、建物の種類など、様々な切り口からの追究活動が可能であり、一人ひとりの思いや考えを活かしながら学習を進めていけると考えた。これらの特徴は、山と海にはさまれた地形と、かつて宿場町・城下町として栄えた歴史に根ざしている。ある視点から、各方位を比べて考えていく中で、現在の町の様子と地形条件（山、海、土地の高低など）、社会条件（駅、国道、小田原城など）に注目しやすい教材であるととらえている。

さらに、小田原の有名なものや施設が多数ある。それは、宿場町として栄えた「伝統」を生かした町づくりを目指す市民の思いや地域への誇りがある。地域のよさを生かした町づくりに気づくことで、「市の様子」「小田原の産業（蒲鉾）」などの学習への広がり期待し、本単元を児童の社会科の学習との出会いとして設定した。

②指導について

《切実な問題について》

小田原城から地域の様子を見下ろし、大まかな地域の様子について知った児童は、「実際に探検に行きたい。」という知的好奇心を持つだろう。探検を通し、児童自身が見たり、触れたりした「事実」は、普段何気なく目にしている物であっても「こんなものもあったよ。」という新鮮な発見として、喜びとともに再認識できると考えている。その喜びは、「みんなに伝えたい。」「話したい。」という思いにつながるだろう。気づいたことはまず書く、少人数発表をするという段階を経て、伝えられる喜びを感じられるようにしていきたい。また、個々の気づきを集めていく中で、様々な特徴に気づくことができると考えた。考えを出し合うことで、児童は「なぜ方角によってこのような違いがあるのか。」という疑問にぶつかることが予想できる。これを、本単元において、児童の切実な問題となりうるものと考えた。この問題の背景には、海や山、土地の高低などの地形的条件、城下町であること、駅や大きな道路などがあり、交通の便がよいといった社会的条件など、多様な条件がある。その疑問を共有し、各活動の後で繰り返し考えを出し合うことでそれぞれの考えにこだわりがもて、切実な問題へとなりうると考えている。さらに様々な条件が重なり合っているので、「これだ」と一つに断定することができない。視点によって、問いに対する答えが何通りも考えられる。友だちの考えに耳を傾けることで、「そういう見方もあるのか。」と納得したり、事実と事実のつながりに気づいたりしていくことができるのではないかと考えた。もっと友達のことを聞きたい、自分の思いを伝えたいという意欲や必要感が生まれやすい課題であると考えた。

《ひびき合いについて》

方面による特徴の違いやその理由について考えを交流する中で、自分と違う見方に出会うことで「なるほど。」と納得したり、つながりに気づいたりする姿をひびき合いの姿としたい。

そのために、まず前時まで一人ひとりが自分なりの考えを持つための活動と考えをまとめる時間を確保する。さらに、少人数での発表練習の時間を設ける。

本時においては、各方面の特徴を比較しやすいような板書を心がける。地形、道の様子、建物の様子などの視点ごとに事実を並べて書くこと、そこから見えてくる考察については色を変えたり吹き出しを使ったりして区別することなどの工夫をする。また、単元を通して、座席表を活用し、さまざまな視点からの考えを児童が知っておくようにすることで、自分の考えを見直したり比べたりしながら聴くことができるようにしたい。さらに、話し合いの途中にも、必要に応じて少人数での意見交流の場をもち、自分の思いを整理し伝える機会を設ける。

単元目標 町たんけんをして絵地図にまとめることを通して、身近な地域の特色や様子は地形条件や社会条件の影響を受け、場所によって違いがあることに気づく。

2年生の生活科「町たんけん」
【地域への愛着、人との関わり】
・地域の人と関わる
・地域のよいところを見つける

●「社会」ってどんな勉強するのか。(オリエンテーション)①

★鳥瞰図を見てみよう。 ————
くらしに関わる様々な場所や物、様子が描かれている。見つけたものを出し合う中で自分の生活圏内へ意識が向かうよう、「見たことある?どこで?」など問い返しをする。

○わたしたちのまちには何があるかな。③

★天守閣から町の様子を見てみよう。
【指導事項】方位
8方位の言い方を知る。また、学校を中心とした東西南北各方位の目立つものや象徴的なものをおさえておく。

<p>【東】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家があった。・〇〇さんの家だ! ・海が見えた。・高速道路がある。 ・マンションがたくさんあるね。 ・エポがあるよ。 	<p>【北】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小田原駅だ!新幹線が走ってるよ。 ・城山中が見えたよ。 ・ぼくの家はあのあたりかな。 ・ビルとかマンションが多いね。 	<p>【西】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山だ。箱根もこっちの方だよ。 ・木ばかりであんまり(建物がない)。 ・競輪場がある。・相洋もあったよ。 ・児童遊園地の電車が走っていたよ。 	<p>【南】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海がある。・高速道路があったよ。 ・学校みたいな建物を見つけたよ。 ・あれなんだろう? ・ぼくの家はあれかな。
--	---	--	--

・あんまりよく見えなかったよ。・あれ、なんだったんだろう。・何があるのかよくわからないよ。・〇〇さんが言ったものを見てみたいな。
・見えなかったけど、東方面には神社があるよ。・ぼくの家近くに、なりわい交流館があるよ。

実際に調べに行きたい。

【指導事項】地図の活用
簡単な地図を用意し、発見したものを書き込めるようにしていく。地図が読めない児童も多いので、目印になるところを確認しながら進む。探検しながら、共有したい個の発見は、広げようとする。

○町たんけんに行こう!⑩

◆西・北方面をたんけんしよう③ 気づいたことを整理しよう②

- ・坂道ばかりで大変だったよ。
- ・景色がよかった。
- ・木がたくさんあった。
- ・自然がいっぱいあったから、生き物もたくさんいそうだな。自然がいっぱいの場所を探したいな
- ・駅の近くには、お土産屋さんがたくさんあったよ。・高い建物が結構ある。
- ・買い物してる人がいた。にぎやか。
- ・駐車場もいっぱいあった。
- ・お土産屋さんがたくさんあったよ。話を聞いてみたいな。
- ・駅にはたくさん人がいたよ。一日に何人くらい来るのかな。

◆東・南方面をたんけんしよう③ 気づいたことを整理しよう②

- ・かまぼこやさんがたくさんあった。
- ・商店街があったよ。
- ・マンションがたくさんあったよ。
- ・なんであんなにかまぼこやさんがあるの?
- ・松原神社に行きたいな。
- ・お店は何件くらいあるのかな。
- ・お寺がたくさんあったよ。
- ・大きい家がたくさんあった。
- ・小田原文学館があったよ。
- ・国道にはいろんなお店があるよ。
- ・西海子通りにもう一回行きたいな。
- ・国道にはどんなお店があるかな。ういろうに行ってみよう。

・せっかくだらな町たんけんに行っているいろいろ調べたから、地図にまとめたいな。
・みんなたくさん発見したから、言葉で書いたらぐちゃぐちゃになっちゃうね。

【指導事項】基本的な地図記号
まず、記号をつけて表す必然性、利便性を感じられるようにしたい。そこで、まずは自分たちの地図を作るという目的に向かい、記号を考える。話し合いの中で「発見」としてあげられたものを、その都度地図に加えていくようにする。

町たんけんして気づいたことを地図に書き込もう。
例えば、かまぼこ屋さんだったら…
・他にどんなマークがあるといいかな。⇒家 マンション 店 お寺 神社
★「地図記号」があるよ。教科書に載ってるよ。

○方角によって町の様子がちがうのはどうして?③【本時】

《気づいたこと》
・東から南にわたって海がある。・海沿いに高速道路が通っているよ。
・南は、大きい家がたくさんあったよ。・国道沿いにお店や消防署もあるよ。
・西側は山になっていて、自然がいっぱい。
・東や北は高い建物がたくさんある。・駅の周りにいろんなお店がある。
・北は、一軒家よりマンションが多い。駅が近いから、便利でにぎやか。
・東と南の間も商店街だけど、昔ながらの静かな感じがする。

《ぎもん》
☆何で東・北は高い建物やお店が多いのかな。
☆何であんなにかまぼこやさんがあんなに多かったのかな。
☆西に建物が少ないのはなんでかな。

「予想」をたしかめたい。
⇒お店の人に話を聞きたい。
・もっとじっくり調べたい。見れなかったところをもう一回見たい。

○グループごとに分かれて調べに行こう!④

<p>東</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔から、かまぼこ屋さんが多い。 ・10軒以上あった。 ・商店街は、〇〇軒あるんだって。 	<p>北</p> <ul style="list-style-type: none"> ・駅には、たくさんの方がいたよ。 ・大きな小田原提灯があったよ。 ・お土産屋さんが〇〇軒あったよ。 ・人気なお土産屋はかまぼこだった。 	<p>西</p> <ul style="list-style-type: none"> ・駅の西口に北条早雲の像があった。 ・階段がいっぱいの広場は、東曲輪って言って戦国時代に小田原城の中心だったところみたい。 	<p>南</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろは、お城みたい。本当は菓屋さんだったんだよ。 ・文学館の中に、北原白秋さんのうたがいっぱいあった。
---	---	---	--

○地図を完成させよう。②

自分たちで作った絵地図を改めて見て、単元の学習を振り返る。
個々の振り返りを交流し、地域にどんなものがあるのか、探検で関わった地域の人、方位ごとの特徴など、様々な視点からみた地域の様子を共有できるようにする。

6 本時について (17/24 時間)

(1) 本時目標 これまでの学習から分かったことをもとに、西方面に建物が少ない理由について考えを交流する中で、町の様子は地形的条件（海・山・土地の高低）や社会的条件（駅・道路などの交通面、城下町としての伝統）など様々な条件が影響を受けていることに気づく。

(2) 本時展開

分	主な学習活動	◎主な支援・留意点 ★評価【観点】
10	1、自分の考えを読み返し、確認をする。 2、少人数で意見を伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> ◎ これまでの学習経験を振り返りやすいよう、見やすい位置に地図を掲示しておく。 ◎ 前時までに考えた事を振り返る。本時話し合うことについて確認し、学習意欲を持てるようにする。 ◎ 少人数で発表の練習をすることで自信をつけられるようにする。
40	4、本時の振り返りをする。(ノートに書く)	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 個々が考える理由の関係性が分かるよう整理しながら板書をする。 ◎ 話が事実から離れ、空想になってしまわないよう適宜、地図やこれまでの経験に戻るようにする。 ◎ 他の地域の資料を用意し、事例として提示できるようにすることで、考えに自信が持てるようにする。 <p>★ 自分の考えを積極的に伝えようしたり、友だちの考えを聞きとらしたりしている。(発言・ノート)【関・意・態】</p> <p>★ 地形的条件や社会的条件を相互に関係づけて考え、表現している。(発言・ノート)【思・判・表】</p>

☆本時について 前時、それぞれに考えた「理由」を話し合ひ、いろいろな視点からの意見が出てくると予想できる。児童にとって、一見それらは「全く違う考え」に思えることであるだろう。数人は、すでに着目しているが、「人が集まる」という点に目を向け、「生活のしやすさ」を考える住民や、「地域の活性化」を願うつづりを担う市民の視点に立っても一度それぞれの考えについて見直すことで、バラバラの理由に「つながり」が生まれるのではないかと考えている。本時は、自分の考え以外の様々な角度からの「理由」を知ることや、それらの「つながり」を意識することができる時間になればよいと考えている。

7 実践を終えて

本単元では、児童の疑問や発見を大切にしたいと考え、進めてきた。そこで、児童一人ひとりの思いや考えとその変容の様子を見取るために、学習感想を書く時間を設けた。ノートに書き溜めていく学習感想の中から、どのように考えているかについて、できる限り丁寧に見取ることに努めた。また、座席表化し、その変化の様子を追うようにしてきた。そこに、願う姿を思い描きながら、共感的な朱記をしていくことを心がけた。これらのことは、その子の問いに対する思考を育てる一助となった。また、抽出児を中心に思考をたどる中で、その子の思考は、生活環境や興味関心に根ざしているということがよくわかった。児童の生活に密着した「地域」を教材として扱ったことで、それぞれの生活経験を生かし、自分なりの視点やこだわりを持ちながら学習することができた。

今後は、「どのような考えをもっているか」だけでなく、「なぜそのように考えたか」という点にも意識を向けていくことの必要性を感じた。児童の思考は、生活の様子、背景や物事の見方、考え方、価値観などに根ざしている。思考の背景に意識を向け、様々な教科での学びの様子や日記、日ごろ何気ない会話などを結び付けながら見ることで、より児童理解が深まる。日ごろから「なぜこの子はこのように考えたのか」という教師の児童理解に徹する姿勢が、より切実な問題を見取ることに、より具体的で学級の児童に即した単元の構想につながるだろうと考えた。

また、一年間を通して「聴くこと」を大切にして指導を続けてきたことで、児童の聴く姿に成長が見られた。静かに聴く姿や、話し手が言葉に詰まってしまった時に言いたいことを推測し、「〇〇さんが言いたかったことってこういうこと？」と、言葉をつなげようとする姿が見られるようになった。意見を言う際にも「さっき〇〇さんが言っていたけれど」「それもわかるけど、でも、ぼくはちょっと違って…」という言葉を使うようになった。友達の思いや考えを受け入れながら聴こうとする姿勢が育ってきた。その姿勢が、安心して自分の思いや考えを語ることのできる雰囲気を作り、ひびき合いの素地となった。

話し合いが、さらに児童主体のものへと変わっていくような手立てを考えていくことが、今後の課題であると考えている。そのためには、第一に、話し合う必要性のある学習課題の設定である。第二に、友達の話の聞き、難しいことやよくわからないことについては、立ち止まって、繰り返したり問い返したり言い換えたりする場を設けることである。そうすることで、相手の考えを理解しようとする姿勢やそのためのスキルを学ぶとともに、様々な表現からのアプローチによって一度では理解できない子も理解するための時間を得ることができると考えている。第三に、教師の出所と出方を吟味することである。始めは教師がモデルとなり、反応を示したり進行をしたりしていくことが不可欠である。しかし、そこから少しずつ児童を信じて委ね、自分たちで何とか解決しようとする主体的な学びを見守り、支えていくことが必要であると感じた。そのためには、より深い教材分析と、児童理解をもとに様々な可能性を想定しながら単元を構想していくことで、教師の出所を最低限にとどめながらも、「ここだけは」というポイントを見逃さない授業力につながる感じた。さらに、板書についても、要点をより簡潔に書くこと、同じような意見はまとめる等の工夫をすることで、児童が学習の中で思考する資料として、より活用しやすいものを目指していきたい。